

『超越論的論理学』におけるフィヒテの洞見

——事実知と三段論法における小前提——

木村 博*

Fichtes Einsicht in der >> transscendentalen Logik <<

---- Das faktische Wissen und der minor im Syllogismus ----

KIMURA Hiroshi

Zusammenfassung

Bekanntlich ist die transscendentale Logik nicht WL selbst, sondern nur eine Einleitung in dieselbe. Insofern sie aber vom faktischen Wissen zu seinem transscendentalen Grund hinausgeht und vom letzteren auf den ersteren herabsieht, kommt sie schon in der WL selbst vor. Anders gesagt, indem sie das faktische Wissen als Bild begreift und in diesem Bild das über das Bild Hinausliegende auch sichtbar macht, hat sie zum Objekt dieselbe Aufgabe, welche die WL hat. Sie behandelt auch ein Wissen vom Wissen. Nach Fichtes Einsicht liegt der Schwerpunkt dieses Grundsyllogismus im minor. „Dagegen der maior und die Conclusion Theile sind aus der Analyse der Erkenntniß“ im minor. In der vorliegenden Abhandlung ergründe ich die untrennbare Beziehung zwischen dem faktischen Wissen und dem minor im Syllogismus und die Bedeutung des minor im Fichtes Syllogismus.

Schlüsselwörter: (faktisches Wissen, transscendentale Logik, Syllogismus, minor, Schema, Bild)

1. はじめに

本稿は、以下の三点に焦点を当て、その意義を説明することを課題とする。すなわち、(1) フィヒテの推理論の重点が小前提にあること。(2) この小前提は事実知を表現していること。(3) 事実は1812年の知識学の図式論における図式IIに対応すること。

周知のように、フィヒテの超越論的論理学は、知識学そのものではなく、知識学への導入ないし入門である。

けれども、超越論的論理学が事実知からその超越論的根拠へと高揚し、超越論的根拠から事実知をとらえかえすことを課題としているかぎり、超越論的論理学はすでに知識学そのもののなかに現れている。換言すれば、超越論的論理学が事実知を像として把握し、この像のなかで像を超えるものを可視化することによって、超越論的論理学は知識学と同じ課題を共有する。すなわち、超越論的論理学は知の知をあつかう。

* 環境・建築学部 人間環境学科 教授

2012年3月30日受付

2012年6月5日受理

たしかに、一般論理学もまた、超越論的論理学と同様に概念と表象の構成に従事する。けれども、一般論理学と超越論的論理学の区別はその取り扱い方にある。一般論理学は、すでに前提されている所与の個別的表象を抽象化し、個別的表象の新しい統一を概念把握する。これにたいし、超越論的論理学は、一般論理学が前提する個別的表象のなかにすでに統一が含まれていると考える。したがって、「事実知を、そのなかで純粋直観の本題であるもの、思考の本題であるものの観点から吟味すること」¹⁾がきわめて重要となる。この意味で、超越論的論理学の課題は、その根本において、事実知の分析と再構成にほかならない。

ここで留意しておくべき点はずぎのとおりである。すなわち、すでに事実知に推理構造が内在していること、である。そのための事例を引用していえば、「そこにある最初で唯一の像は、ふたたび端的に自己を見て、客観化し、自己自身の像であり、直観でなければならないであろう。しかも、その像は、自己を事柄そのものとしてではなく、像として直観しなくてはならないであろう。それゆえ、像は、どうじに自分の概念でなければならないであろう」(TL/12, IX, S. 160)。ここでは明らかに、事実知のなかに三つの構成部分がある。すなわち、第一に像の存在であり、第二にこの像の直観であり、第三にこの直観がどうじに自己を像として概念把握することである(Vgl. ebenda)。それゆえ、フィヒテの強調するところにしたがえば、「像の根源的な事実知のなかにあるものを、三段論法の形式における再生産によって」(TL/12, IX, S. 160)解明することが肝要となる。

さて、本稿の課題からみて、こうしたフィヒテの観点、1812年の知識学、とりわけその図式論と深く関係していることは重要である。というのも、フィヒテの推理論では、事実知としての小前提が本質的な役割を担っているが、その小前提の由来は図式 II にあるからである。

本稿が注目するのは、事実知と三段論法における小前提との不可分な関係²⁾である。そこからえられる結論は、小前提は、そこにおいて大前提が小前提と出会い、両者が一致する、そうした場³⁾である、という点にある。

2. 事実知と図式 II

すでに言及されたように、超越論的論理学の課題は、

事実知の分析と再構成である。超越論的論理学は、事実知をその発生において把握し、そうして把握されたものを像として提示する。この観点が、現象としての像世界を、けっして外側からではなく、徹底して内側から開いて照出することを可能とする。そして、この観点こそ、図式論にもとづく。

私見によれば、図式論における図式 II は事実知を示し、特別な位置を占める。図式論にもとづいて、フィヒテは、図式 I を「現象は現れる」⁴⁾と定式化する。図式 II は「現象はみずからに現れる」(WL/12, X, S. 348)である。図式 I は原図式ないし原像である。図式 II は図式 I の図式である。図式 I において、唯一の不変的現象、すなわち、いかなる対立も許容しない純粋な同一性が提示される。図式 II では、生成と多様なものを許容する現象が提示される。前者においてはいかなる変化もない。後者、つまり持続する原像の新しい像においては、無限の変化がある。だが、どうじに、ここにつぎのような不可避的な問題が示されている点に十分に留意しておく必要がある。すなわち、「現象において、そして現象が根底として置かれた場合、いかにして一性と不変性が多様性ととも十分に存立しうるか」(WL/12, X, S. 338f.)という問題である。たしかに、原像としての図式 I と像の像としての図式 II との統一は、像の像の像としての図式 III によって遂行されるようにも思われる。図式 III が意味するのは「現象は、みずからに現れるとして、みずからに現れる」(WL/12, X, S. 342)とされているからである。だが、より厳密にとらえれば、図式 II は、なにゆえに図式 III が必要とされるのかという理由を含むものであることが分かる。すなわち、「現象はみずからに現れる」という図式 II は、超越論的論理学の説明を援用していえば、「現象は端的にみずからにたいしてある」(TL/12, IX, S. 209)とされるが、この対一自一構造こそ、図式 III が求められる根拠を説明するのである。

まず第一につぎの点が注目されてよい。すなわち、いっさいの知は、現象がみずからに現れるという絶対的事実から出発する。みずからに一現れることがなければ、いかなる自己一認識もない。事実知のこうした自己叙述がなければ、知識学もまた不可能である。純粋な同一性は図式 I で示されるのにたいし、図式 II において強調されるのは、現象の自己にたいする関係である。現象がみ

ずからに現れるという形式においては、「或るもの、すなわち現象自身がそれに (*der*) 現れること。それが (*die*) 一なるもの、すなわち自己自身に現れること」(WL/12, X, S. 348)という二つのもの、つまり現象自身と自己自身とが不可分の連関で示される。換言すれば、両者の二重性が、みずからに一現れることをとおして示されているのである。このみずからに一現れることが、図式 I における純粋な現象を可視化する。なぜなら、いまふれた二重性は「主観－客観形式」(WL/12, X, S. 349)にほかならないからである。みずからに一現れることは、主観的には、「それに現れるそれ」つまり自己自身であり、客観的には、「現れる当のもの」つまり現象自身である。みずからに一現れることにおいて、それに現れるそれとは見るものとしての主観性であり、現れる当のものとは見られるものとしての客観性である。前者は、主観性としての現象であり、後者は客観性としての現象である。「主観も客観も完全に同じものである。ただ、主観として、客観として区別されるだけである」(Ebenda)。——明らかなように、図式 II が示す、現象がみずからに一現れるというはたらきのなかで、見る－見られる関係としての主観－客観形式が可能となる。

つぎに第二に注目しておくべき点は、図式 II が二つの区別された像、すなわち直観の像と概念の像をみずからに一現れるという同一のはたらきによって産み出すことである。概念は形式であり、「いっさいの内容をもたない、たんなる形式的な現存在」(WL/12, X, S. 352)である。直観は内的本質であり、図式 I の質的な内容である。図式 II において、概念は前景にあるとしても、直観は隠れたままである。いいかえれば、概念形式は「自己に還帰する、現象の形式」(WL/12, X, S. 353)として示されるとしても、現象が与える内容は依然として隠れている。ここに、直観の主観－客観的内容が概念の主観－客観的形式にたいして求められる所以を示す根拠がある。

それゆえ、つぎのようにいうことができるであろう。すなわち、図式 I と図式 II は直接対立しているのではなく、図式 II のなかで一性と多様性が相互に区別し合いながら互いに関係し合うのである。図式 II におけるこうした関係が図式 III を基礎づける。

フィヒテがいうように、事實的知の規定された定式は「現象はまさに端的かつ直接にみずからに現れる」

(WL/12, X, S. 342)である。これにたいして、知識学の規定された定式は「現象は、みずからに現れるとして、みずからに現れる」(WL/12, X, S. 355)である。

以上からつぎの点は明らかであろう。すなわち、図式 II は事實的知を表し超越論的論理学の対象であること、そして図式 III が本来の哲学である知識学の対象だということ、である。超越論的論理学は、事實的知を内側から開くものであって、それゆえ、小前提を重視する。というのも、事實的知には知の知との不可分の関係が内在するからである。

3. 事実知と超越論的論理学

すでにふれたように、超越論的論理学は、その本質的な部分においてすでに知識学を表す。それゆえ、超越論的論理学が真の意味で対立しているのは一般論理学である。たしかに、一般論理学もそれが論理学であるかぎり、知を対象とする。しかし、超越論的論理学と一般論理学は、知という同一の対象をもちながらも、それをとりあつかう方法において、根本的に異なる。まさに、この方法の違いにおいて、超越論的論理学のたぐいまれなる積極性が示される。

フィヒテによれば、一般論理学は、個別的对象を抽象することによってはじめて概念の獲得が可能となると考える。換言すれば、まず個別的对象が前提とされ、つぎにこの個別的对象が統一と結合される。だから、個別的对象と普遍的概念とを結合するのは思考する主体の抽象作用である。「普遍的ないし抽象的概念の産出」(TL/12, IX, S. 113)はまさに思考する主体にもとづく。これにたいし、超越論的論理学は、表象のうちにすでに統一との結合があると考えている。すなわち、「いずれの表象もそれ自身多様なものの統一」(Ebenda)なのである。

一般論理学の主張によれば、「わたしが個別的存在ものをそういうものとして限定するものをそのままにしておき、ただ類を限定するものだけを取り上げるべきだ」(TL/12, IX, S. 119)となる。たとえば、ある植物といった個別的存在にはさまざまなメルクマールがある。これらのメルクマールは、了解によって分析され区別される。目前にある個別的存在は、さまざまなメルクマールに分解される、たとえば、「その植物が生息している場所、知覚される時間、全体の大きさ、個々の部分相互

および全体にたいする大きさ、物質の適性、植物が全体に合一される法則等々に分解される」(TL/12, IX, S. 117)。当然のことながら、個別的な徴表は類に対応する像ではない。個別的な徴表を超えて、個別存在の像を普遍的な像へと高揚させるためには、個別なものを個別なものとして特徴づけている、そうした徴表、例えば「場所、時間、一定の大きさ」(Ebenda)を捨象しなくてはならない。そうして、普遍的な徴表、例えば「物質の一定の特性、諸部分相互関係および割合、生成の法則、ここでは成長」(Ebenda)を産出されるべき像のなかに取り上げなくてはならない。かくして、このような論理的自我の操作によって、植物一般の根本概念が成立する。

フィヒテによれば、以上の一般論理学の操作には、説明すべきものをすでに前提とする、そうしたトートロジーがある。つぎの指摘はわれわれの問題関心をいっそう刺激する。すなわち、「個別的な存在は、生命の内部で、自我の自由な行為によってはじめてその普遍的概念にもたらされるのではなく、直接的な知覚のなかにあるとき直ちに普遍的概念のもとに把握されるのだ。現象は、後になってようやく物体、植物、動物といった概念のものに(概念はそれ自身自由な産出によってはじめて成立するとされるのだが)位階づけられるのではなく、知覚するときそのまま概念のもとに把握されるのだ」(TL/12, IX, S. 119)。ここでは、論理的な自我が自由な抽象の担い手ではない。換言すれば、「人間ないし自我が考える」(TL/12, IX, S. 120)という前提が崩れる。この意味において、知は自己によってかつ自己の本質によって考えるのであり、それ以外にはけっして考えようがない。

以上から、超越論的論理学と一般論理学の見方の違いを理解することができるであろう。超越論的論理学によれば、自我が考えるのではなく、知が考える。超越論的論理学は、自我が行っているのは根源的な知のたんなる再生産にすぎないことを知っている。しかし、一般論理学は、「自我が行っているものこそ最初の根源的な思考そのものであると思こんでいる」(TL/12, IX, S. 121)。

超越論的論理学は事実から出発してこれを説明する。なぜなら、超越論的論理学のなかに知の根源的な生命の表出があるからである。それゆえ、超越論的論理学の課題は事実的知の分析と再構成である。この観点から、超越論的論理学は、事実のなかで事実を超えているものを

可視的にすることによって、新たな地平を切り開く。

周知のように、可視性の条件は、像が現象のなかで形成されることにある。というのも、像なくしてはいかなる認識も不可能だからである。ところで、像の特性は、「たんなる模像、分離された反射」(TL/12, IX, S. 194)だという点にある。像がそうした反射であることによって、はじめて像はそのようなものとして成立する。それゆえ、像は自立的なものではない。この非自立性が、ぎゃくに、像と像を超えて写像されるべきものとの間の端的に不可分な連関を映し出す。像は、写映というみずからの本質によって、絶えず自己自身を超えていく。像は、写像するものを自己の外にもつのではなく、つねに自己のうちにもつ。たとえ、像において写像されるものが像を超えているものだとしても、像は、これを自己自身との連関のなかで表出する。像を超えているものが像のなかで可視的となる⁵⁾。

それゆえ、つぎの点は明らかであろう。すなわち、像論は、超越論的論理学においてもまた適用されるのである。

4. 事実知と三段論法における小前提

「現象はみずからに現れる」という図式Ⅱを分析することは、すでに確認してきたように、超越論的論理学の本来の課題である。フィヒテによれば、超越論的論理学は、哲学から考察された論理学である。この点で、超越論的論理学は、知識学がもつと同じ課題を実現する。

「存在論」ではなく、「現象論」としての知識学の根本的特性にかんしていえば、知識学は現象の展開を説明する。超越論的論理学も、現象がみずからに現れるままの姿を説明する。それゆえ、超越論的論理学は、三段論法における小前提を重要視する。というのも、小前提こそ事実知以外のなにもものでもなく、この事実知に知の知との不可分な連関が内在しているからである。

たしかに、フィヒテは三段論法の理論を十分に展開していない。けれども、小前提にむけた観点は、フィヒテの深くて新しい洞見を示している。

現象がみずからに一現れること(図式Ⅱ)は、現象の対一自一構造を示すものである。それゆえ、現象はみずからを見る。現象がみずからを見るときは、現象がみずからを認識することである。現象がみずからを認識すると

は、現象が自分の像を形成することである。像のこうした特性からいえば、像はつねに端的に自己自身の像のなかにある。もし多様な像があるとすれば、それらの像は一つの像によって伴われており、「一つの像のなかに」(TL/12, IX, S.184)ある。この像の普遍的な像存在が多様な像にほかならない。普遍的な像存在は、「現象一般の存在形式の絶対的根本命題にもとづく。現象は、それが像としてみずからに現れることなくしては、どこにもまたいつでも、いかなる形態においても、ありえない」(Ebenda)。けれども、この統一は、ただ「多様なもののたんなる形式的な統一」(Ebenda)にとどまる。「質料的な統一、多様なものの閉鎖性は、依然として立証されていない」(Ebenda)。

この点は、いかにして現象は形式的な統一において質料的な統一をなにか疎遠なものとしてでなく、現象自身として見ることができるのか、別言すれば、いかにして現象は自分の像を内容に即して生成の形式のもとでもちうるのか、という問いにおいても示されている。この問いにたいする応答を試みることによって、つぎの点が確認される。すなわち、現象は自己自身を現象自身の原理として見るのである。

けれども、こうした立証は特別な困難を伴う。たしかに、これまでみてきたように、根本原理を「存在の像に伴われていないような、いかなる現象の存在もない」

(Ebenda) ととらえることはできる。現象は生成するものである。現象の生成は、生成の像 a だけでなく、その全変化のなかで像でありつづけるという像 b とによって伴われる。だが、現象がこうした生成のなかで生成するものだということ、このことはいかなる像によっても伴われていない。ここには「間隙」(TL/12, IX, S.185)がある。換言すれば、「直観されないものが直観の原理と存在根拠として」(Ebenda) がある。それゆえ、この間隙を乗り越え、直観されないものを新しい像概念によって把握可能にしなければならぬ。そうでなければ、像概念の枠組みそのものが破棄されてしまう。求められる像概念は、「これまで構想されていたものとはまったく違う仕方」(Ebenda) 探求されなくてはならない。

こうした困難を解消するために、フィヒテは、三段論法、とりわけその小前提を拠り所とする。フィヒテが挙げる三段論法の事例はつぎのとおりである。

大前提：現象は、現象自身がそれである当のものだけを直観する。

小前提：ところで、現象は生成を直観する。

結論：それゆえ、生成において生成するものは現象自身である。

(Vgl. TL/12, IX, S.186)

ここで留意しておくべき点は、なるほど大前提は普遍的な法則を示すものであるとしても、この法則はアプリオリな知として完成されていない、ということである。法則はただ事実においてのみ可視的となる。可視性のない法則は端的な無である。それゆえつぎのような方向で進むことが求められる。大前提は法則の知を表現するが、この法則の知によって現象が支配される。現象が生成における生成するものの自己直観に至り得るのは、現象が小前提における生成の直観という場でみずからを「見るものとして」(TL/12, IX, S.187)現れさせることによってである。すなわち、「これまでのように、ただたんに現象の自己直観を定立するだけでなく、現象のたんに形式的で閉じられた像をもまたみずから定立し、この像のなかに現象がみずからを見るものとしてまず現れさせる」(Ebenda) のでなければならない。別言すれば、この問いにたいする解答の鍵は、けっして存在するのではなく、ただ生成するだけの、原理としての絶対的生成のもとで、閉じられた生成を「そうした現実的な生成の個別的な像として」(Ebenda) みいだす点にある。

フィヒテがここで像概念を新しいものによって拡大していることは明らかである⁹⁾。それによって、「直観についての見解のまったく新しい領域に歩みいる」(Ebenda) こととなる。

上述したことから、以下のようにいうことができるであろう。すなわち、小前提は、絶対的生成が閉じられた生成と出会う場である、と。この確信を確認するために、われわれはフィヒテのつぎのことばを引用したい。フィヒテは、知の絶対的形式を三段論法とみなす。すなわち、根源的な知をもたらす、根源的で唯一の根本三段論法を以下のように述べる。

(1) 法則の直観、すなわち現象は端的に自分の像を伴

う。

(2) 現存するものを像として事実的に知的に直観すること。

(3) それゆえ、この像が現象の偶有性であり、現象に属するという洞見。すなわち像として自己を一了解すること。

これが知のあらゆる事実性のなかの絶対的で形式的な三段論法である

(TL/12, IX, S. 367.)

この根本三段論法は、さきに述べた三段論法に対応する。さきの三段論法は、いかにして現象は生成における生成するものを自己自身として認識するかという問いをもたらしした。これにたいしては、絶対的生成と閉じられた生成との合一によって、解答した。この合一が新しい像概念を提示した。たったいま述べられた根本三段論法は、同一の事態を叙述するものである。大前提における法則の直観は、さきの三段論法における絶対的生成を示す。そして、小前提における法則の事実的直観は生成するものである。両者の合一は、小前提における事実的な直観の総合的な統一にもとづく。この核心を、フィヒテは事実的な三段論法においてより詳細に説明する。

フィヒテは、たしかに、事実的な三段論法を根本三段論法の下に位置づける。けれども、それによって、かえって小前提の重要な役割が明確になる。事実的三段論法の特徴は、根源的で事実的な知のうちにあるものを、三段論法の形式において再生産すること、にある。たしかに、事実的知は、法則によって限定される。けれども、どうじに、法則はただ事実においてのみ可視的となる。それゆえ、ここで重要となるのは、事実と法則のあいだの総合的な相互限定である。この点で、事実的な三段論法は、「根源的で事実的な認識」(TL/12, IX, S. 381)の再生産である。

さて、小前提のメルクマールは、たしかに、「事実を法則の下へ包摂すること」(TL/12, IX, S. 379)である。けれども、フィヒテによれば、包摂は「端的に」

(Ebenda) 生起するのであって、けっして間接的な推理によってではない。それゆえ、正当にも、「では、いかにして事実を法則の下に直接包摂するのか？」という問いが立てられる。これにたいしてフィヒテはつぎのよう

に答える。すなわち、「間接的な推理の根底には、絶対に直接的な推理があり、前者は後者によってのみ可能となる」(TL/12, IX, S. 380)と。こうした根源的な認識が、推理のなかで、像として表される。「すなわち、この像が三段論法の小前提である」(Ebenda)。結論を引き出すものは、それゆえ、すでに小前提の包摂のなかにある。

ここでつぎの点を留意しておく必要がある。すなわち、包摂は単線的な適用だけを意味しているのではない。というのも、包摂は判断であり、「直観のなかで与えられているものが法則にしたがって構成されるべきものと合致する」(Ebenda)という判断だからである。この合致が、限定された事実的知のもとで無限な法則がみいだされることをもまた意味する。それゆえ、小前提は、そこにおいて大前提と小前提が出会い、両者が合致する、そうした場なのである。これが、「超越論的論理学」における根本的な洞見にほかならない。——事実的な三段論法の重点は、それが三段論法における根源的で事実的な認識の再生産であるかぎり、小前提のうちにある。「これにたいして、大前提と結論は」、小前提における「認識の分析から生ずる部分である」(TL/12, IX, S. 381)。

参考文献

1) J.G.Fichte : *Ueber das Verhältniß der Logik zur Philosophie oder transscendentale Logik*, in : *Fichtes Werke*, hrsg.v.I.H.Fichte, Bd.IX, Nachgelassenes zur theoretischen Philosophie I, Berlin 1971, S.316. —以下において、略号 TL/12、巻数、ページ数を本文において丸カッコで示す。

Vgl. auch : J.G.Fichte : *Ueber das Verhältniß der Logik zur Philosophie oder transscendentale Logik 1812*, hrsg. v. R. Lauth und P.K.Schneider, PhB Bd. 337, Hamburg 1982.

2) 参照、松本正男『ドイツ観念論における超越論的自我論——大文字の<私>』創文社、2002年、335頁以下。

3) フィヒテ哲学における場の問題については、つぎの拙稿をも参照のこと。Hiroshi Kimura : *Fichte und Tekirei Edo : Bild und Feld*, in : *Fichte-Studien* Bd. 30.

4) J.G.Fichte : *Die Wissenschaftslehre 1812*, in :

Fichtes Werke, hrsg. v. I. H. Fichte, Bd. X :
Nachgelassenes zur theoretischen Philosophie II,
Berlin 1971, S. 348. —以下において、略号 TL/12、巻
数、ページ数を本文において丸カッコで示す。

5) この点については、つぎの拙稿をも参照のこと。

Hiroshi Kimura : Sehen und Sagen : *Das Sehen sieht
das Aussagen seines Grundes*, in : Fichte-Studien
Bd.20, S. 220.

6) 参照、松本前掲書、369 頁。

*本稿は、2009～2011 年度科研費（研究課題：像と場の
パースペクティブから、絶対者と場所という問題群を再
検討するための基礎研究、課題番号：21520040）にもと
づく研究成果の一部である。